

## 第6章 総括

柏木城跡は、北塩原村大字大塩に位置する標高約500mの山頂を主郭として周囲に曲輪を配する天正期後半の山城である。主郭を含めた中心部の規模は東西に約300m、南北に約200mで、周囲の山麓には更に遺構が広がっている。曲輪や土塁、馬出し、堀切など、遺構が良好な状態で残り、虎口や土塁、区画施設に石積みを使用しているのが特徴である。高石垣のある若松城を嚆矢とする織豊系城郭が会津で展開する前段階の、天正期における石積みが多用された城郭である。

この城は会津の戦国大名である蘆名氏により築かれたと考えられる。『異本塔寺長帳』や寛文12年(1672)成立の『会津旧事雑考』には「柏木城」・「柏木森城」の城名がみえ、「天正12年」築城と記載される。築城期の領主は天正12年10月6日に死去した蘆名盛隆、もしくはその跡を継いだ蘆名家の遺児亀若丸であり、蘆名氏直轄の城として城代が置かれたとされ、史料には三瓶大蔵の名があがる。築城後は蘆名氏領国境の境目の城として、会津の北に接した米沢を領する戦国大名、伊達氏に対する会津の防衛拠点となった。

伊達氏は、政宗が天正12年10月20日頃に当主となるも、その年は病により動きを見せなかった。明けた天正13年4月頃から会津侵攻の動きを活発化させ、5月3日政宗自らが会津領である桧原を攻略し、その地に桧原城（小谷山城）を築城して会津侵攻の拠点とした。桧原を護っていた蘆名方は、この時、「大塩」に引いて城を堅固にして立てこもったと『政宗記』に記されているので、この時点で柏木城が蘆名方の城として存在していたことは確実であり、築城の時期も重なる可能性も指摘されている。

大塩は大塩川を主要な河川とする山間の谷あいであり、米沢から桧原をへて会津盆地北方へ入る際や猪苗代から磐梯山を北に迂回して会津へ入る際の経由地であり結節点でもある。また、大塩を下り関屋へ出るとそこは既に会津盆地の入口である。柏木城は、地形的に見ても盆地に出る直前の場所で防御に利した谷あいを望む場所にあり、蘆名氏が、領国防御の要、境目の城として築いたと考えることができる。

築城後、蘆名氏と伊達氏は、柏木城と桧原城の間でにらみ合いを続けた。『政宗記』によれば当初政宗の軍が大塩に向かい、柏木城を眼下にして桧原に引き返したという。

天正17年、摺上の戦いで蘆名義広は伊達政宗に敗れている。柏木城は主戦場となることはなく、摺上の戦いの翌日に伊達方が柏木城に入った際には城兵の姿はなく自落していた（『伊達家日記』）。伊達政宗が黒川に入り会津を領した段階で柏木城は境目の城ではなくなることから、天正17年に柏木城は廃されたとみられる。

柏木城跡中心部は、曲輪1・2・3、帯曲輪1、土塁、虎口（枳形虎口含む）、堀切、土橋などからなる主郭を中心とする曲輪群と、馬出と曲輪4、塹堀、石塁などからなる東方の防御を強く意識した曲輪群から構成される。

虎口や土塁などで使用される石積みは、天正期後半に関東甲信越地方にみられる石積みを多用した戦国期城郭のものに類似しており、当地における代表例と言える<sup>[註12]。</sup>また枳形虎口や大平石、馬出も同じ頃のものとして時代性をよく表す。

北や西側には斜面を下った場所に連続する平場群があって城域は更に周囲に広がるとみられており、その規模も大きなものとなる。技術的には当時の最新技術が諸処に反映されており、会津の戦国大名蘆名氏の築城技術の粋が凝らされたものといえ、石積み等の天正後期における築城技術の検討や周辺

地域との比較をする上でも1つの基準とすべきものであり、本城黒川城跡や向羽黒山城跡とともに重要城郭と言える。

また、周辺の環境を含め、北塩原村内を通る米沢道（旧米沢街道）沿いには蘆名氏と伊達氏が築いた城館跡や、鉾山に関連する遺跡もよく残されており、遺跡に立てば、北塩原村域を舞台に繰り広げられた奥羽の覇権を賭けた戦いの歴史を体感することができる空間が広がっている。

柏木城跡は、地域にとって特に重要な歴史的文化財であるということができよう。

|     |  |
|-----|--|
| 註)  |  |
| 註1  | 石川2008では関東地方で約100ヶ所前後の城館で石積みの報告があるとされている。  |
| 註2  | 松本茂氏は石積みの枳形虎口のある新規木村館で城の破却を検討する中で、「新規木村館の機能時期を、天正14年10月の田村清顕死後から天正18年8月の豊臣秀吉による奥州仕置の間と考えれば、ほぼ4年である」と、その年代を比定する〔松本茂2001〕。またその石積みを伴う枳形虎口については、千田嘉博氏が「在地（伊達氏）の技術で造られた、屈折した織豊系城郭プランと評価し、天正10年代の所産とする」〔千田1992〕とし、また「在地の技法の発展を基本」とするとした〔千田1994〕。   |
| 註3  | 後の検討を踏まえ、石田2007では50箇所が確認されているとした。  |
| 註4  | 北垣聰一郎氏からご教示いただいた。大平石の語は〔北垣1981〕による。所謂「鏡石」の呼称については、戦国時代にその語を使用されていたか不明である。石田明夫氏は、虎口1「門の脇には、魔除けの大きな石「鏡石」が組まれています。」〔石田2007pp41〕とするが、「魔除け」と理解する根拠については確認できなかった。 <p>参考「大平石（身がくし石）　おおひらいし（みがくしいし）万治元年(1658)、細川氏による江戸普請では、長さ3m、横幅2.7m、控(奥行き)0.9mの伊豆石を大平石として使用した。・・・こうした例はすでに慶長年間（1596－1615）から散見できる」〔北垣1981〕</p> 「巨石　きよせき　大石を献上石として紹介した例は天正14年（1589）に豊臣秀吉の家臣蒲生氏郷が京都の方広寺大仏殿建立の際、搬入した石材は縦横それぞれ二間×四間の大石であった。自らの忠勤ぶりを、また自らの権勢を世間に顕示できる絶好の機会でもあった。」〔北垣1981〕 |
| 註5  | 平成25年8月現地を実検いただいた北垣聰一郎氏からご教示いただいた。その際、北垣氏からは幅の広い直線的な通路への出入り口であることや、直線的な通路は平坦であり且つ主郭南土塁からの防御が強く意識されている点などについても、柏木城の大手口・大手道を考慮する際に留意すべきであろうとのご指摘をいただいた。  |
| 註6  | 「城に入るには、大手口の他にも北に面し四箇所の虎口がありました。門は、敵の北側に面して石積石垣を使用した高度な建築技術によって造られ、その内側は、門から中心部へ折れ曲がりを多用した登城ルートが待ち構え、その複雑さ、嚴重さをわざと見えるようにしています。」〔石田・佐藤2007〕   |
| 註7  | 鈴木　啓氏からご教示いただいた。また、このような残りのよい馬出が現存しているのは珍しいとのご指摘もいただいている。  |
| 註8  | 北垣氏からは、区画Dを構成する東と南の土塁の傾斜角度が、つながっている帯曲輪I南土塁の傾斜角度よりもやや急である点をご指摘いただき、築城時と時間差を持ってつくられたものである可能性も含めて検討すべき旨、ご教授を得た。   |
| 註9  | 石田明夫氏はこの部分に、枳形虎口を想定する〔石田1999〕。   |
| 註10 | 齋藤慎一氏はそうした考え方を「戦国大名系城郭論」として批判する〔齋藤2003〕。   |
| 註11 | 松岡氏は南東北の城館を下記のように分類する〔松岡2004c〕。 <ul style="list-style-type: none"><li>「a　「領域」の中心的な城館。黒川城、長沼城、慶徳館・猪苗代城、守山城、三春城など。本戦の場はおそらくその付近に限定される。・・・」</li> <li>「b　「領域」の境界を固める軍事性の強い城館。大平城、門沢館、柏木城であるが、これらは駐屯拠点としての機能を兼備し大規模になっている。しかし常駐兵数には明白な限界があり、虎口や遮断線など嚴重な防備をはかっけていても自落と背中合わせであった。だからこそ精兵の配置は欠かせなかった。この時期特有の矛盾を強くはらんだ存在といえる。」</li> <li>「c　主力群の中継拠点としての城館。・・・」</li> <li>「d　「領域」全体のなかでは副次的な意義を担う城館。・・・」</li></ul>  |

会津若松城跡の石垣

会津若松城跡の石垣

註12 「この地域で築城技術の発達した好例は、柏木城のような軍事的緊張に直接対応する城館に多く、領域中枢的な城の場合、近世初頭に大改修されて元の形状をうかがえなくなったものが多いためもあるが、類似の水準を確認できる事例が乏しい。」〔松岡2004a〕

「この地では天正18年以後の改修が考えられないうえ、小振りの石材を垂直的に積み上げた技術は織豊系との相違が明確で、蘆名の築城技術の頂点と評価してよい。」〔松岡2004c〕

会津若松城跡の石垣

会津若松城跡の石垣

引用・参考文献

- 相田 優ほか 2004 『会津若松市史13 会津の大地』会津史学会編 2009 『新訂 会津歴史年表』歴史春秋社
- 石川安司 2008「北武蔵の城郭石積み」『中世東国の世界3 戦国大名北条氏』
- 石野友康ほか 2012 『金沢城石垣構築技術資料Ⅱ』石川県金沢城調査研究所
- 石田明夫 1999 「葺名氏・伊達氏の中世城館跡」『福島考古』第40号
- 石田明夫 2001 「東北南部における戦国期の城郭について」『福島考古』第42号 福島県考古学会
- 石田明夫・佐藤一男 2007 『会津路 武士の世の裏磐梯』
- 伊藤豊松 2007 「第4章 近世 第7節藩行政下の本村」『北塩原村史 通史編』北塩原村
- 北垣聰一郎 1981 「城郭用語辞典 普請」『日本城郭体系 別巻Ⅱ』新人物往来社
- 北垣聰一郎 1987 『石垣普請』法政大学出版局
- 北塩原村史編さん委員会2007 a 『北塩原村史 資料編』
- 北塩原村史編さん委員会2007 b 『北塩原村史 通史編』
- 齋藤慎一 2003 「戦国大名系城郭論覚書」『戦国時代の考古学』高志書院
- 佐々木修 1988 「20.柏木城」『福島県の中世城館跡』福島県文化財調査報告書
- 佐竹正廣 1998 「南奥の中世城館-佐竹氏の進出過程-について」『中世城郭研究』12
- 鈴木 啓 2013 「山城・平城と石垣」『第一回城サミット福島大会』資料
- 千田嘉博 1992 「木村館の構成」『東北横断自動車道遺跡調査報告15 木村館跡』福島県教育委員会ほか
- 千田嘉博 1994 「町村地域の中世社会と城館」『東北横断自動車道遺跡調査報告28 猪久保城』
- 千田嘉博 2000 『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- 千田嘉博・小島道裕編 2002 『天下統一と城』塙書房
- 高橋 明 2007a 「第三章 中世」『北塩原村史通史編』北塩原村
- 高橋 明 2007b 「第三章 中世編年資料」『北塩原村史資料編』北塩原村
- 高橋 明 2009 「伊達政宗の会津侵攻」『会津若松市史研究』第11号
- 高橋圭次ほか 2002『河股城跡発掘調査報告書』川俣町教育委員会
- 中井 均 2000 「織豊系城郭の展開」『天下統一と城』国立歴史民俗博物館
- 長島雄一 2007 「第二章第二節=② 城館跡」『北塩原村史資料編』北塩原村
- 松岡 進 2000 「南奥羽における築城技術の発展」『天下統一と城』国立歴史民族博物館
- 松岡 進 2002 『戦国期城館群の景観』校倉書房（初出1998「伊達氏系城館論序説」『中世城郭研究』12）
- 松岡 進 2004a「城館研究から見た戦争と戦場」『陸奥国の戦国社会』高志書院
- 松岡 進 2004b「氏康期の北条領国における城館と戦争」『定本・北条氏康』高志書院
- 松岡 進 2004c「城館跡研究からみた戦争と戦場」『【もの】からみる日本史 戦争Ⅰ』
- 松本 茂 2001 「木村館の破却」『城破りの考古学』吉川弘文館
- 村田修三 1981 「城郭用語辞典 城の部位、馬出」『日本城郭体系 別巻Ⅱ』新人物往来社
- 耶麻郡役所 1919 『福島県耶麻郡誌』（歴史春秋社復刻版1978刊）
- 渡部新一 1987 『北塩原の城館柵』

関連調査の報告 1

## 柏木城跡について

石田 明夫

### 1. 城跡の位置

喜多方市から北塩原村役場を東に、大塩川溪谷沿の国道459号を裏磐梯の桧原方面へ進むと、温泉から塩が獲れたことに由来する大塩裏磐梯温泉がある。住宅と温泉宿が立ち並ぶ大塩集落の南側急斜面上にある杉林、雑木林、畑、水田に石垣を持つ柏木城がある。

大塩集落から主郭部分は、比高約110m高い位置にあり、雄国山麓の北斜面にあたる南西の大久保集落とは約30mの比高となっている。南西からすると攻め安く、北側から見ると、幅約20mで高さ 5 m以上の大塩川溪谷が城の手前にあることから、攻めにくい場所にある。

柏木城が築かれた当時、北東の萱峠から見ると、正面に東西1.1kmに渡り、高さ 5 m以上に造られた土塁と石垣が見え、城に入る門となる大手口の両側には石垣が築かれ、大きな壁となって見えていた。

城に入るには、大久保集落から下ると商工会と駐車場と村活性化センターがあり、そこは清野六郎屋敷跡と伝えられている。その東に位置する大手口との間には、米沢街道が通るように造られている。この場所は、交通の要衝でもあり、主要街道の米沢街道を抑えることにより、人の出入りと、敵の進攻を阻止する役目があったと推定される。

北側には、大規模な土塁で区画するだけでなく、北の大塩川と東の蟹沢川を最終的な外郭とするように工夫して造られてもいる。大塩川の内側に街道と宿場、山塩の生産をしていた小屋が立ち並んでいたと推定される。敵襲などがあれば、村人は、城に入り、加勢することになっていたであろう。

### 2. 柏木城の築城時期

柏木城は、伊達政宗の侵攻を防ぐために、米沢街道に面して蘆名氏が築いた守りの城である。『会津旧事雑考』には「是歳（天正一二年）築 大鹽邑柏木森城屬 此邊衆士（『会津鑑』では150騎とある）於三瓶大蔵而令守於伊達氏」と書かれているが、正確に、築城年代は判明していない。

『新編会津風土記』では、蘆名義広によって天正12年に三瓶大蔵を城番とし、伊達氏に対抗し新たに築いたと書かれている。しかし、天正12年とすると蘆名義広ではなく、当時の領主は、盛隆が正しいようである。その頃蘆名氏は、後継を巡って内部混乱が続いていた。

伊達政宗の陣所

(1) **伊達輝宗、政宗の桧原侵攻と葺名氏の混乱**

米沢を領主とする伊達氏は度々、裏磐梯の桧原に侵攻していたと思われる。『檜原戦物語』には、永禄7年（1564）、伊達勢は侵攻し、行動を察知した桧原の穴沢俊恒は、桧原峠に空堀を掘り、伊達勢を待ち構え撃退した。その翌年穴沢氏は、戸山に戸山城を築き一族を交代で詰めさせている。永禄8年（1565）、戸山城は伊達勢約800人で攻められている。永禄9年（1566）、伊達勢は1月の雪深い中侵攻したものの穴沢俊恒、俊光らの活躍で撃退する。しかし、この資料は、後世に書かれたものであり、信ぴょう性に疑わしい部分がある。



図 10-1 柏木城跡全体図 (石田明夫原図)

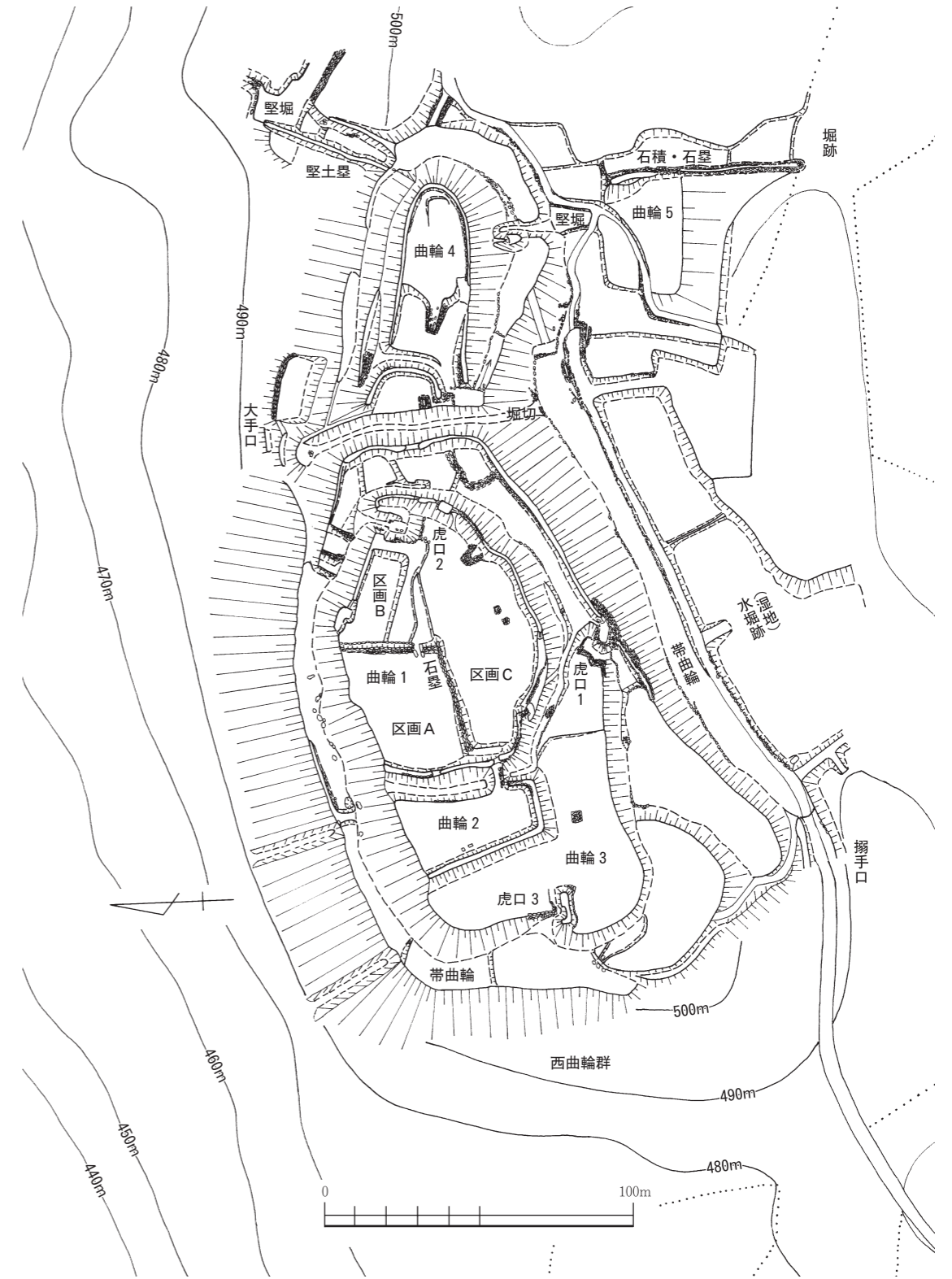


図 10-2 柏木城跡主郭

会津を支配していた蘆名氏は、黒川、現在の若松に居城の黒川城があった。その支配は強固とは言えず、天正8年(1580)6月17日、16代盛氏が死去すると、後継には盛氏の肝煎りで須賀川より人質にしていた二階堂盛隆が継いでいる。

そのころ天下統一を目指していた織田信長に対し、蘆名盛隆は、天正8年8月6日、信長の安土城

へ家臣の荒井万五郎（会津美里町上荒井）を送り、駿馬3匹と蠟燭千挺を送っている。

天正12年（1584）10月6日には、『会津四家合考』によると盛隆が、黒川城内の御殿南縁で鷹を置いて座っていたところ、背後から家臣の大庭三左衛門によって惨殺される事件が発生している。盛隆は24歳の若さで、子の亀若（王）丸は2歳と幼児であったことから、蘆名家は大混乱となる。蘆名家を継いだ亀若丸の母は、伊達晴宗の娘で、盛興・盛隆の夫人であった。天正12年（1584）盛隆が死去すると、秀吉や常陸の佐竹義宣に接近を図った蘆名氏は、政宗と対立するようになり、米沢街道の要衝であった大塩に柏木城を築城したと思われる。

### 3. 城跡の遺構

大手口から曲輪1（主郭）へ入るには、城の正面となる北側の大手口から入ったようだ。

米沢街道を萱峠から大塩へ下ると、その正面には、興泉寺や、東の台地上に中島氏が築いたとされる中島館が見えた。

大塩川に架かる大塩橋を渡ると、高さ10m以上の断崖の下に街道沿いに配置された大塩集落があり、大手口は、北塩原郵便局の街道南側に位置していたと思われる。

遺構はいくつかの区域に分けられていたようで、北曲輪群にある大手口は、入口が低く、両側が高く造られて門が埋まったように見える埋門形式となっていてと思われる。そこから、西側に造られた幅一間の山道をジグザクに上ると、石垣の大手門が待ち構えてと思われる。大手門の西側には、自然地形を利用した大きな土塁が造られている。大手門からジグザクに主郭へ上ろうとすると平場が連続する北曲輪群となる。そして、主郭の曲輪1に入る手前に石積みで積まれた平場の下を通り主郭の曲輪1へ到達する。

#### (1) 北曲輪群と大手口

北曲輪群には、城の大手口や曲輪1に入るルートがあり、いざという時に家臣団を取りまとめて留めて置く、大きな平場があった。そのため、石積みや城の飲み水を確保する水手もあった。大手虎口は、城が使用されなくなると石積みは破却されたと推定される。西側には、自然地形を利用した土塁の遺構があり、長さ約200mで高さ5mあり、土塁を石で補強して造られている。

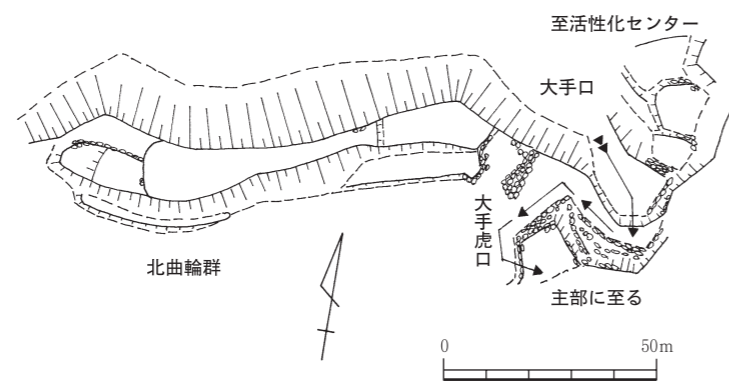


図10-3 柏木城跡北曲輪群外溝 天正12年（1584）築城

#### (2) 曲輪1（本丸）の遺構

主郭の中心部に入るには、明確で大きな虎口はなく、複雑に造られている。東に進むと北に面して、埋門で造られたものが大手入口と推定される。この門は、敵が侵入した場合、上から大きな石を落とし、門の内側を石や土で塞ぎ開かなくして敵の侵入を防ぎことになっていたようである。門から階段や梯子や細い通路で中に入ると曲輪1の中心部分となる。内部は平坦で、北西部分には、石塁で分けられた区画があり、東向きに門があった。内部には御殿や櫓が建てられていたと推定される。この曲輪の南は、土塁で、南東部には一間四方の櫓台もある。さらに、西と東は空掘で区画され、それぞれ

木製の橋が架けられ、いざという時は橋を落とすことになっていた。

南西部分には、裏口と推定される搦手があり、埋となっていた。また、曲輪は、帯曲輪が巡らされ、南の搦手には、石積石垣で造られた内枳形の虎口があります。門の脇には、魔よけの石「鏡石」が組まれていたようである。虎口の外側は、高さ15mの自然地形を利用した土塁となり、表面は自然石が貼られた土塁となっている。土塁は、いずれも石で堅められ、塀や柵が巡らされていた。南東部分には、石塁で区画された部分があり、何かを保管した倉があったと考えられる。また、西側には石積みの外枳虎口がある。

#### (3) 馬出しの遺構

曲輪1の東には、木橋と空掘で区画され、その曲輪の形はやや角張った半月形をした馬出がある。角か丸の馬出であり、その造り方は、武田信玄が多用した技法で、甲斐や信濃で発達したものとよく似ている。その遺構は、主郭を死守する役目があったと思われる。また、南側には、石垣となる内枳形の虎口がある。

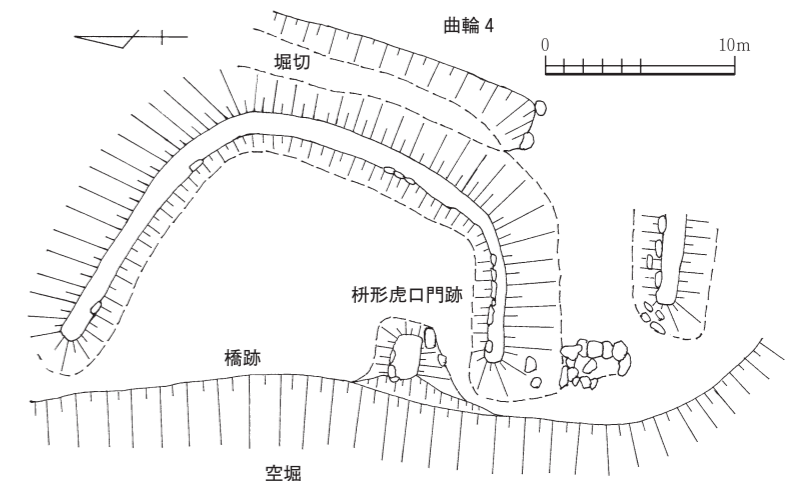


図10-4 馬出の実測図

#### (4) 西曲輪群と搦手口

西曲輪群は、曲輪1の西側に位置するもので、通称「ニシグルワ」と呼ばれていた。五段から六段の細長い平場があり、北曲輪群からの道が二本見られる。一部は畑となり、西側には沢を利用した堀跡がある。南東部分に、現在山道となっている所には、裏口にあたる搦手が存在したと思われる。石積みで防御され、南側の水堀の調節も兼ねていたようである。

#### (5) 東側の遺構

曲輪1の東には、中曲輪群がある。北側が堅堀と堅土塁で分けられ、南側は堅堀と石積み、石塁で曲輪1と厳重に分けられていた。尾根上には、3段から4段に造られた平場があり、北に面して長さ200m以上高さ約2mの石垣が連続している。石垣の下にも六段の平場群があり、その下は急斜面の崖で、攻めるにはかなり難しい。南には、自然の沢を利用した幅4mから10mの水堀が掘られている。

この曲輪群の東には、石積みで守られた虎口がある。虎口の西側は、自然地形を利用した高さ5mの土塁で、南は、堀で分けられ、北に面し防御が厳重となっている。

#### (6) 東曲輪群

中曲輪群の東、柏木城では最も東に位置している。東曲輪群の東端には、幅10mの堀跡で分けられ、さらに外側には自然の丘陵を利用した大きな土塁があり、さらに外側には現在水田となって、堀跡で防御されている。そして、最も東側には、蟹沢川の高さ20mの深い溪谷が最終防御ラインとなっている。丘陵上は平場で構成されているが、北にと東に面し、石垣がある。北側には3箇所石積みで造られた虎口があり、最も東の虎口は、石積みは、良く残されている。

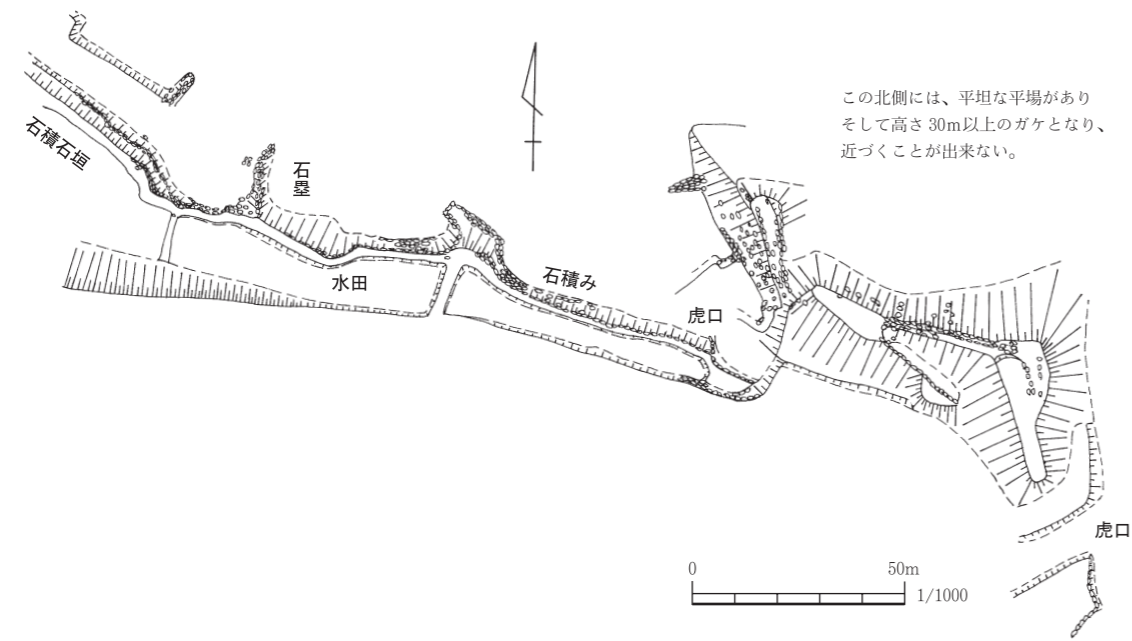


図 10-5 柏木城跡中曲輪群外構 天正 12 年 (1584) 頃築城

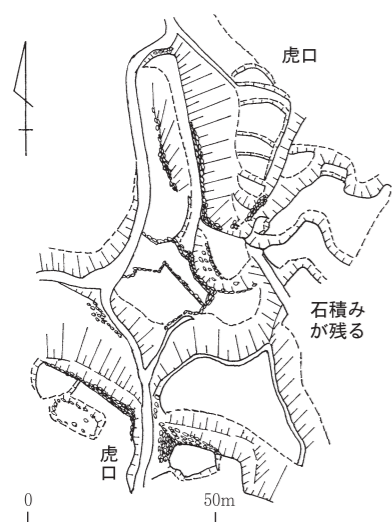


図 10-6 柏木城跡東曲輪群虎口 1  
天正 12 年 (1584) 頃築城

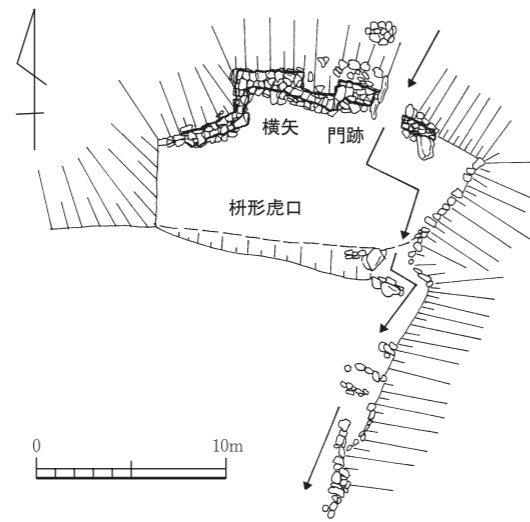


図 10-7 柏木城跡東曲輪群虎口 3

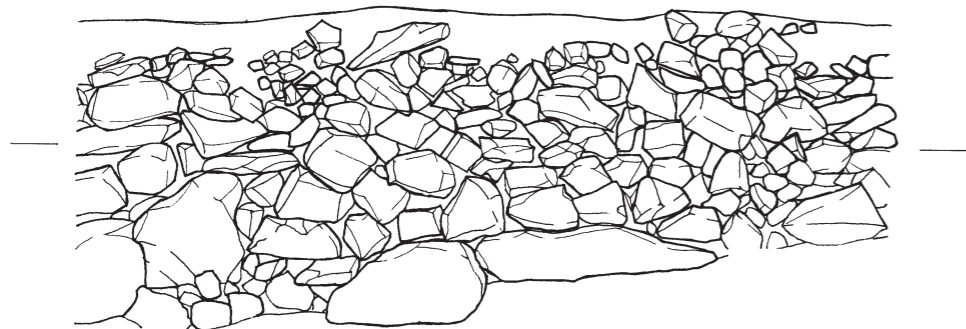


図 10-8 主郭曲輪 5 石積み (S=1/40)

台地北端には、長泉寺と墓地部分に狼煙を上げた古い段階の中島館があった。『新編会津風土記』には「村中ニアリ 地字ヲ中島ト云 今民家トナリ 堀土居ノ形ナシ 天正ノ頃葺名ノ臣中島美濃某ト云モノコレニ居ルト云」と書かれている。

#### (7) 柏木城の石積み

柏木城の大きな特徴は、石積みが積まれていることである。その石積みは、表面から見れば、若松城や猪苗代城と同じ石垣に見えるが、内部は大きく異なっている。柏木城では、裏側に小石を大量に入れ、水はけを良くして石垣の崩落を防ぐ「裏込め石」が入れられていないのが特徴である。東北では、福島県を中心に約50の城跡で例がある。

#### 4. 柏木城の絵図

柏木城には、城を描いた絵図がいくつかある。「大塩邑柏木森白城之図」、「耶麻郡大塩邑柏木城」は江戸時代に描かれたもので、「大塩邑柏木城之図」は、大正 8 年に発行された『耶麻郡誌』に掲載された図である。

『耶麻郡小沼組之図』（村指定）は、江戸時代に小沼組の村々を描いたもので、「柏木古城」と書かれている。「大塩邑柏木森白城之図」、「耶麻郡大塩邑柏木城」は、『耶麻郡誌』に描かれた元図のようである。図は、明和元年（1764）から寛政 4 年（1792）までの江戸中期に描かれたものと推定される。

#### 5. 柏木城の最後

この城は、天正17年（1589）の摺上原まで城の改修は続いたものとみられる。天正17年に、『伊達治家記録』によると、政宗家臣原田氏がこの城に入ったときは空であったとされている。城跡の石に火災の痕跡が見られることから、火を放って退却した可能性もある。その後、伊達家臣が入ったとも考えられるが、文禄 4 年（1595）の豊臣秀吉よる『富岡文書』にある 7 城以外の諸城は破却命令で完全に消滅した可能性がある。

#### 参考文献

- 石田 明夫 1999「葺名氏・伊達氏の中世城館跡」『福島考古』第40号
- 石田 明夫 2000「東北地方の織豊以前の石垣について」『第17回全国城郭研究者セミナー』
- 石田 明夫 2001「東北部における戦国期の城郭について」『福島考古』第42号
- 石田 明夫 2005『小山田城跡』会津若松市教育委員会
- 石田 明夫・佐藤一男 2007『会津路 武士の世の裏磐梯』北塩原村

関連調査の報告 2

## 柏木城の文献による沿革

高橋 明

### 永禄年の緊張

永禄7年（1564）、伊達氏家督となったばかりの輝宗が蘆名氏と争った。蘆名氏の圧迫に苦しむ義兄の二階堂盛義を援けて岩瀬郡に出兵し、長沼城を奪い取ってしまい、蘆名氏がこれを奪還せんとするに抗したのである。

7月9日、輝宗が綱木に出馬して松原を攻めた。

### 伊達輝宗書状 <sup>(1)</sup>

伊達輝宗書状

此方へ一昨日馬をいたし候、かねて申付候ことく、をのへ<sup>(談合)</sup>たんかういたし、きたかたへてたての儀、いかやうニもはしりめぐり申へく候、あひことハるまてなく候へとも、まつへさかいニ火のてをあけさせ申候へく候、そこもとの義かたくかせき<sup>(釋ぎ)</sup>ニあるへく候、是よりハ明日はたらきをなすへく候、吉事重而、謹言、

七月十一日 輝宗（花押）

中津川九郎三郎殿

同太郎右衛門尉殿

同二郎右衛門尉殿

伊達輝宗書状

輝宗は家臣の長井庄中津川郷（山形県西置賜郡飯豊町の南半）の領主中津川氏に、赤崩山を越えての北方口攻撃を指示している。

輝宗の叔父にして信夫郡大森城主の伊達実元が「草」を出し、「在家四五ヵ所放火」させて引かせる<sup>(2)</sup>。その草調儀は土湯峠を越えて猪苗代口への潜入が考えられようか。これらは、蘆名氏の長沼への兵力集中を牽制したものである。

しかしながら、翌8年2月に蘆名盛氏・盛興父子は長沼に出馬して、盛興は5月迄とどまり<sup>(3)</sup>、盛氏は8月迄とどまってその戦闘を指揮する<sup>(4)</sup>。

8年3月にも、「長井」より「北方へ」の攻撃が行われたようである<sup>(5)</sup>。『北塩原村史資料編』345・51収載の「仙道会津元和八年老人覚書別本」が8年7月の戸山城攻撃と9年正月の松原村攻撃を詳述するが、7年7月と8年正月の合戦を記憶違いして記述した可能性が考えられる。

9年（1566）正月、盛義が降参して、嫡男盛隆を証人として差し出し<sup>(6)</sup>、輝宗は長沼城を返却して和睦した。そして、妹を養女として盛興に嫁がせる事を約束する<sup>(7)</sup>。この輝宗の妹との縁組は、盛氏が同盟関係にあった父晴宗に「懇望」して一旦成約したものであった<sup>(8)</sup>。それを、あらためて、輝宗

の娘分として縁約したのである。

天正元年（1573）冬以後、盛氏が輝宗にその「次男、会津江可指越之」き事を「頻」りに求め、「当時、言之約束計も可申候由、再三懇望」した<sup>(9)</sup>。同2年5月10日には盛興が、「御次男早速指越御申様」懇請する使者を発する<sup>(10)</sup>。およそ1ヶ月後の6月5日、盛興は病死する<sup>(11)</sup>。盛氏・盛興父子は輝宗次男を盛興の養嗣子に迎えようとしたものであろう。それはならず、「会津御名代絶申候につき」、証人として黒川にあった盛隆が跡を継いだ<sup>(11)</sup>。

輝宗は先に、「次男」すなわち「彼童子、致成人候者差越、盛氏奉公為致事も可有候」と「挨拶」した。輝宗はこの事を田村氏に知らせて、「以時分、可得意見候」と求めた<sup>(9)</sup>。輝宗は、伊達と友好関係にあり、蘆名と敵対関係にあった田村清顕の意向を危惧したものと思われる。盛隆が跡を継ぐも、輝宗との友好関係は両者の代を通して続く。

永禄7、8年の緊張の時期に、柏木森に築城がなされた可能性は乏しく思われる。蘆名氏が、松原守備を援ける将兵を派遣した形跡がうかがえない。幾分の築城の可能性を考えるならば、この時限りの臨時的仮設的な砦であったと思われる。

天正元年の築城

### 天正年の築城

「旧事雑考」が天正12年（1584）の柏木森築城をいうが、この年それを必要とする蘆名・伊達氏間の緊張はうかがえず、可能性は乏しい。「新編会津風土記」も同様に述べるが、同書は凡例に「会津ノ事ヲ記セル書、世ニ流布スル者モ多ケレトモ、皆齊東ノ野語ニテ、引用ウルニ堪ル者ナシ、独寛文ノ頃、家土向井吉重カ著ハセル旧事雑考・四家合考ノミ備用ノ一種ニ充ツ」と記して、「旧事雑考」に従ったものである。

この年10月20日頃、政宗18歳が伊達家当主となり、米沢城主となった。父輝宗41歳からの突然の移譲である。政宗は「御年少ヲ以テ頻ニ御辞退アリ、然レトモ親族・老臣等モ固ク勸メ奉ル、因テ其命ニ従ヒ給ヘリ」という<sup>(12)</sup>。

この月6日、蘆名盛隆が急死した。黒川城中において近習大場三左衛門に弑逆されたという<sup>(13)</sup>。

常陸太田城主佐竹義重が盛隆の遺児亀若丸当歳の嗣立を働きかけた<sup>(14)</sup>。輝宗が政宗の弟竺丸の入嗣を工作したことが考えられて<sup>(15)</sup>、義重はその阻止を策したものと考えられる。結局、亀若丸の嗣立となる。政宗家督はその5、6日後の決定であった。直後、政宗は体調を崩して<sup>(16)</sup>、12月半ばまで寝込む<sup>(17)</sup>。

「松原軍物語」が、11月26日松原の穴沢家当主俊光の従弟四郎兵衛が、伊達兵を引き入れて「小谷山ノ溪」に隠し置き、風呂の会を催して俊光等を謀殺したとするが、全くの虚構である。

翌13年（1585）3月半ば、政宗は岳父の田村清顕と蘆名・岩城両氏の和睦仲介を策して、それに佐竹氏を誘う。佐竹氏が賛意を示し、それを伝える家臣の書状4通のいずれも佐竹・伊達氏間の格別なる「昵懇」をいう<sup>(18)</sup>。

4月18日、政宗が辺見上総守に次のような朱印状を発した。

**伊達政宗朱印状**<sup>(19)</sup>

右意趣者、其口、当方如存分之取成候ニ付而者、一、さいかちたいせん寺分一村



伊達政宗の肖像

天正17年正月、「とびたかた」が<sup>(舊 田 方)</sup> 松原城の後藤信康と米沢城に在る伊達政宗に年始の酒肴等を届けた（針生寅次郎氏所蔵片倉家文書『北塩原村史資料編』三128）。同年6月7日から10日の間、三橋在馬の政宗の元に「会津の家老富田美作（氏実）・平田不休（氏範）・同名周防（舜範）」が本領を安堵し、「備付の与力の身代被相立被下」んことを求め、政宗の黒川城攻撃に合わせて、城中に「火の手を上げて」呼応する事を申し出た（『政宗記』巻六）。これら3名は「内々伊達政宗の舎弟を代統にせんと僉議したる」身とする説がなされる（『四家合考』巻之三）。

- (16) 遠藤家文書『伊達氏重臣遠藤家文書・中島家文書～戦国編～』34。
- (17) 三浦守氏所蔵文書『仙台市史資料編10伊達政宗文書1』6・受心書状取意文「貞山公治家記録」天正12年12月17日条。
- (18) 伊達家文書『会津若松市史8』246頁・遠藤家文書『伊達氏重臣遠藤家文書・中島家文書～戦国編～』33。
- (19) 引証記一『仙台市史資料編10伊達政宗文書1』12。
- (20) 木幡家文書『北塩原村史資料編』三144。
- (21) 政宗記『北塩原村史資料編』三64。
- (22) 仙道会津元和八年老人覚書別本『北塩原村史資料編』三66。
- (23) 『北塩原村史資料編』三60。
- (24) 『北塩原村史資料編』三139。
- (25) 「蘆名家御旧臣見聞録二」。
- (26) 会津古塁記『北塩原村史資料編』三62・「会津鑑」・「会津四家合全」。
- (27) 「旧事雑考」。
- (28) 東京大学史料編纂所添付表紙題「山口道齋物語」。
- (29) 「仙道七郡古軍談」。
- (30) 登米懐古館所蔵登米伊達政宗文書『北塩原村史資料編』三84。
- (31) 『北塩原村史資料編』三134。
- (32) 「伊達天正日記」。
- (33) 「政宗記」巻六。
- (34) 伊達天正日記『北塩原村史資料編』三135。
- (35) 原田・新田勢の松原着陣は「天正日記」天正17年6月1日条（『北塩原村史資料編』三131）。
- (36) 「伊達家旧記」所収「諸境警固賦之日記」。
- (37) 「氏郷記」。

三瓶大蔵の肖像

関連調査の報告 3

## 三瓶（三平）氏について

三瓶大蔵の肖像

高橋 充

三瓶大蔵の肖像

　　柏木城の城番とされる三瓶大蔵および三瓶（三平）氏に関して、これまでに気づいた史料を集めてみた（後掲4．三瓶（三平）氏に関する史料　参照）。できるだけ確実な史料を重要視しながら、考えてみたことは、以下の通りである。

三瓶大蔵の肖像（左）と三瓶（三平）氏の肖像（右）

三瓶大蔵の肖像（左）と三瓶（三平）氏の肖像（右）

三瓶大蔵の肖像（左）と三瓶（三平）氏の肖像（右）

三瓶大蔵の肖像（左）と三瓶（三平）氏の肖像（右）

三瓶大蔵の肖像（左）と三瓶（三平）氏の肖像（右）

- 16世紀の史料として5点を確認（史料①～⑤）。
  - 史料①　享禄元（1528）年　「三平五郎左衛門」
  - 史料②　天文13（1544）年　「三平五郎左衛門尉」
  - 史料③　天文14（1545）年　「三平因幡守氏次・同隼人佐」
    - 永禄3（1560）年　「三平讃岐守」
  - 史料④　天正13（1585）年　「三瓶上野守・同虎丸」
  - 史料⑤　天正17（1589）年　「三平大蔵」

○史料⑤より「三平大蔵」が実在したことが確認できる。「ちうけん」（中間　下級の従者）を抱える程の力量のある武士であり、摺上合戦直後に従者が伊達方に斬殺されていることから、蘆名方の軍勢の中でも名の知られた武士のひとりであった。合戦後の大蔵本人の動向は不明。

○「三平」と「三瓶」が同一の氏族名とすれば、読みは「さんぺい」か。

○史料③より、会津だけでなく中通り（安達郡）にも同名の一族がいたことになる。太田亮『姓氏家系大辞典』（角川書店）によると、田村氏・須田氏（須賀川）の家臣にも三瓶を名乗る者がいたという。

○三瓶（三平）という地名は、福島県域では未確認（『福島県の地名』平凡社）。三瓶氏の出身地（名字の地）については不明。

### 2．蘆名氏との関係

○史料①②より、「三平五郎左衛門（尉）」は、蘆名氏の直轄領とみられる門田庄内に知行地を与えられる（可能性のある）立場にあった。理由はわからないが、蘆名氏からは所領の面で厚遇をうけており、家臣の中でも臣従の度合が高かったと思われる。

○史料④は、「三瓶上野守」父子が高巖寺へ土地を売却した史料であるが、対象になっている敷地は、高巖寺の敷地の周延部（大門近辺等）と考えられることから、高巖寺の寺勢を拡大させるような意味の売買であったと考えられる。この寺は、蘆名氏先祖の菩提寺のひとつで、その再興に三瓶父子が積極的に関わっていたことになる。ちょうど盛隆が殺害され、幼い亀若丸が家督を相続した蘆名氏権力の不安定な時期であり、この頃に三瓶父子は蘆名氏権力を強力に支える立場にあった。

○三瓶大蔵が柏木城の城番であったとする証拠は、同時代史料にはない。編纂物の記述（史料⑥～⑬）では、三瓶大蔵は城番として派遣・配置され、近隣の多くの武士（「衆士」）を指揮する役割を担っ



三瓶（三平）氏

たとされている。前記の通り、三瓶一族の中には蘆名氏から知行を与えられる者や、蘆名氏の菩提寺に寺地を売却する者があり、総じて三瓶一族の蘆名氏に対する臣従度は高かったといえる。大蔵も同様であったとすれば、伊達氏と対峙する最前線の城郭に常駐する重大な軍役を務めたということも十分に首肯できる。

### 3. 今後の課題

○三瓶氏と種橋氏との系譜関係（史料⑬⑭など）

○藩政期の三瓶氏（参考史料⑯⑰など）

出羽山形出身で保科正之に仕え、会津入り 足軽クラスの下級武士
十六世紀の三瓶（三平）氏との系譜的なつながりは不明

三瓶（三平）氏

### 4. 三瓶（三平）氏に関する史料

(1)同時代史料（文書・日記・棟札など 写しを含む）

①享禄元（1528）年「蘆名盛舜諸公事免許判物」
〔大石直正「史料紹介『境澤文書』』『東北学院大学東北文化研究所紀要』7 1976年〕
（花押 蘆名盛舜）

奥州会津蛭川庄内大村并

門田庄之内境沢之村、両所共ニ諸

御公事令免許所也、但門田

事者、御世躰ニ付候所ニ候之間、三平五郎左衛門ニ

出候はん時者、不可有問答候、於子々孫々

不可有違儀状、如件

享禄元年〔戊子〕十二月廿八日

境沢左馬助殿

②天文13（1544）年「蘆名盛氏諸公事免許判物」

〔大石直正「史料紹介『境澤文書』』『東北学院大学東北文化研究所紀要』7 1976年〕
（花押 蘆名盛氏）

奥州会津蛭川庄内大村并

門田之庄之内境沢之村、両所共ニ

諸御公事令免許所也、三年

一度之棟役、春秋之段銭之事、

無違背可被相澄候、門田之事者、

御世躰ニ付候所ニ候間、三平五郎左衛門尉ニ

出候はん時者、不可有問答候、於子々

孫々不可有相違之状、如件

天文拾三年〔甲辰〕十二月廿七日

境沢左馬助殿

○境沢氏は蘆名氏の家臣。「蘆名氏に対する臣従関係はきわめて強く、蘆名氏の直臣ともいうべき関係にあった」（大石）。境沢氏の所領である大村（会津坂下町勝大）と境沢村（会津若松市界沢）に

三瓶（三平）氏

かかる「諸御公事」を、蘆名盛舜・盛氏父子が免除する内容。「但門田之事者」以下の部分の解釈は難解だが、「ただし、門田庄内（この場合は境沢村）は、蘆名氏の直轄領なので、もし（境沢氏から）三平五郎左衛門へ知行を替えるようなことがあっても訴訟を起こしてはならない」という意味か。そうであれば、三平五郎左衛門は、蘆名氏によって門田庄内に知行を与えられる可能性のある武士であったことになる。

三瓶（三平）氏

③永禄3（1560）年「金連明神棟札銘写」
〔『相生集』巻十一所収 『岩磐史料叢書』（中）歴史図書社 一九七一年〕

白岩

金連明神〔本文に蓮に作るは誤也〕

祭神金山彦命也、天文十四年壬寅林鐘二十九日木幡山学頭法亮辨、願主三平因幡守氏次・同隼人佐、裏に永禄三年卯月十日大旦那大内備前守、願主三平讃岐守再興と棟札にありし、三平氏は何人なるをしらず、いつれ大内の属下とみえたり（以下略）

○安達郡白岩村（本宮市 旧白沢村白岩）にある金連明神の棟札の銘文に三瓶を名乗る複数の人物が見える。表面は天文十四年（干支が壬寅なのは天文十一年）「三平因幡守氏次・同隼人佐」、裏面は永禄三年「三平讃岐守」、いずれも社殿の再建の際の願主とみられる。大旦那が大内備前守（定綱）であることからすれば、この三瓶氏は大内氏に仕えた武士か。この史料については太田亮『姓氏家系大辞典』（角川書店）。

三瓶（三平）氏

④天正13（1585）年「三瓶上野守他屋敷売券写」
〔『新編会津風土記』巻十七所収 高巖寺文書〕
（朱印 印文「止々齋」）

右、永代売渡申候屋敷事、彼在所者、高巖寺大門大町面石塚屋敷、南ハ石橋迄也、従路東三間口、地子参百文、自路西仁間口、地子四百文、是に賀藤屋敷之内老間口差添、地子百廿五文也、大門之西東ヲ合、以上六間口、地子八百廿五文之所、永代諸役夫公事御免、守護不入ニ代物五貫参百文ニ永代売渡申候事実也、於子々孫々、全此下地不可有相違者也、仍為後日之状、如件

天正十三年〔乙酉〕三月七日 売主

三瓶上野守
同 虎丸

高巖寺学天和尚 参

○黒川の高巖寺（浄土宗 会津若松市中央）は、蘆名盛舜（盛氏の父）が、亡父の盛高の木像を納め、大永2（1522）年に寺の屋敷地と門前の田を寄進している。蘆名氏先祖を供養する寺（菩提寺）のひとつ。この史料では、寺の大門両側や周辺の土地が高巖寺に売却されているが、当該地は寺院の敷地と連続すると考えられるので、実態としては寺地の拡大のような意味があったと推測される。三瓶父子が寺地を提供し、蘆名氏権力（当主は亀若丸）が朱印を捺して保証している。蘆名家の家印（中興の祖である盛氏の齋号「止々齋」の印文）を使用。

三瓶（三平）氏

⑤「伊達天正日記」九 天正17（1589）年6月9日条
〔『伊達史料集（下）』人物往来社 1967年〕
とり 九日

天気よし、北方之さふらい衆各々御参候、とうのへつとう御参候、御やくら罷出候、打月より御うちとり被申候よし、御使上御申候、夜入、三平大蔵之ちうけんきらせられ候

○同じ史料の6月6日条に「大塩あけかたに引申候」とあり、摺上原での決戦（6月5日）の翌朝に大塩の城（柏木城）は開城している。8日から10日にかけては、北方の侍たちが政宗のもとに、あいついで投降している。三瓶大蔵本人の動向は不明。「ちうけん」（中間）は、公家・武家・寺社等に召し使われる従者のこと。中世の武家の場合、家子・郎等（郎従・殿原）より下位の従者。三瓶大蔵が、家子・郎等や中間など多くの従者を擁する有力な武士であったことがわかる。政宗など伊達方の面々の前で斬殺されているのは、あるいは見せしめのような意味もあったか。

(2)編纂物（江戸時代成立の史書・地誌・記録など）※いわゆる軍記物については未調査

⑥『会津旧事雑考』巻七 天正12年条[『北塩原村史資料編』三60]

是歳、築於耶麻郡大塩邑柏木森城、属此辺ノ衆士三瓶大蔵、而令守襲於伊達氏檜原ヲ変、此城東西百二十五間、南麓馬場在焉、長九十間、横四間、其以南濠也、東西百三十余間、広二十五間

※写本の中には、「此城東西百二十五間」の後に「南北三十五間」とするものもある。

⑦『異本塔寺長帳』天正12年条[『北塩原村史資料編』三59]

十二年〔甲申〕会津大塩邑柏木山築城、三瓶大蔵ヲ置〔是檜原口ノ要害也〕、此城〔東西百二十五間、南麓馬場長九十間、南北百三十間、馬場広二十五間〕名柏木城

⑧『富田家年譜』天正12年条[『北塩原村史資料編』三61]

今年、耶摩郡柏木森城築キ、辺衆ノ兵士招属三瓶大内蔵、伊達松原令襲之変事守

⑨『会津古墨記』[『北塩原村史資料編』三62]

一、大塩村柏木城〔東西七十八間、種橋大蔵大輔住、後三瓶大蔵重実居、南北百間〕

⑩『会津要害録』[『北塩原村史資料編』三63]

柏木ノ森ノ墨

大塩村ヨリ十余町此方海道ノ上ニ有リ、此城天正ノ頃三瓶大蔵ヲ入レ置テ、此辺ノ武士百五十騎ヲ属スト云、今モ亦如形ノ要地也

⑪『会津鑑』巻三十五「大塩邑」

城号柏木森、東西七十八間・南北百間、種橋大蔵太輔住、後三瓶大蔵重実住、或曰東西百二十五間・南北三十一間未詳、

天正十二〔甲申〕年築邑柏木森城〔村ヨリ余丁、北方街道在上〕、属此辺衆士百五十騎於三瓶大蔵而令守於伊達氏檜原変、此城東西百二十五間、南麓ニ馬場在焉、長九十間、其以南濠也、東西百三十余間、広二十五間、今以如形要地也

⑫『新編会津風土記』巻五十六 耶麻郡小沼組大塩村「古蹟」の項

柏木城跡 村南五町山上ニアリ、東西百二十五間・南北三十五間、南ノ麓ニ長九十間・幅四間ノ馬場

跡アリ、其南ニ東西百三十間余・南北二十五間ノ空壕アリ、本丸・二三ノ丸ノ形、堀切ノ跡残レリ、天正十二年葦名義広コレヲ築キ、三瓶大蔵ヲ城番トシテ此辺ノ武士百五十騎ヲソヘ米沢ノ押ヘトシ、檜原村ノ繫トセシ所ナリ、今ハ皆田圃トナル

⑬『蘆名家御旧臣見分録』（写本 会津図書館蔵）

（タの項）

|                   |          |
|-------------------|----------|
| 「大塩村柏木城ニ住ス        | 種橋大蔵」    |
| 「代田村ノ館 三瓶民部重朝ノ子息也 | 種橋大和守重則」 |

（サの項）

|                 |         |
|-----------------|---------|
| 「代田村ノ館ニ住ス       | 三瓶民部重朝」 |
| 「檜原二番手ノ備役 大塩ニ住ス | 三瓶大内蔵」  |
| 「山東大槻神明館ニ住ス     | 三瓶隼太」   |
| 「侍組             | 三瓶大助」   |
| 「御近習 父ハ大蔵       | 三瓶平七良」  |
| 「太守御側付          | 三瓶安左衛門」 |

（ミの項）

|                           |  |
|---------------------------|--|
| 「大塩柏木ノ館ヲ守 添臣百五十騎五千石 三坪大内蔵 |  |
| 元ハ山三郷小沼ヲ領ス、又大垣ニモ住ス」       |  |

⑭『蘆名家旧臣記』（写本 会津図書館蔵）

|                               |  |
|-------------------------------|--|
| 中目式部大輔組士のひとり「大塩ノ地首 父山城 三坪大内蔵」 |  |
| 栗村弾正組士のひとり「父山城 三瓶大助」          |  |
| 大番頭8人のうち「父藤十郎 姓ハ三坪 大塩柏木ノ城代    |  |
| 種橋大蔵組士 後三坪ト改ム」                |  |
| 平小姓組32人のうち「父ハ大蔵 三瓶平七郎」        |  |
| 太守公前後左右旗本外様300余人のうち「三瓶安左衛門」   |  |

⑮『芦名家故臣録』（写本 会津図書館蔵）

|                              |  |
|------------------------------|--|
| 「大塩柏木ノ館ヲ守ル、添臣百五十騎 五千石 三坪大内蔵」 |  |
|------------------------------|--|

(3)参考 会津藩政期の三瓶氏

⑯『会津藩諸士系譜』

・三瓶勝五郎勝虎 独礼御目見以上

・三瓶家

|                             |  |
|-----------------------------|--|
| 寛永十三（一六三六）年召出 羽州最上・三十俵二人扶持  |  |
| 三瓶九郎右衛門一九右衛門某一九右衛門某一加津右衛門勝明 |  |
| 一治兵衛勝宗一勝右衛門勝重一勝五郎勝虎         |  |

『会津藩家世実紀』

- ⑰『会津藩家世実紀』
  - 承応3（1654）年5月8日条 刊本一卷489頁
    - 足軽三瓶忠左衛門：最上出身 鉄砲の名手 物頭樋口七郎右衛門預
  - 延宝3（1675）年8月23日条 刊本3巻209頁
    - 猪苗代士三瓶九右衛門
  - 享和元（1801）年8月19日条 刊本15巻153頁
    - 三日町組付三瓶幸助 長屋

『会津藩家世実紀』

- 〈付記〉
  - 史料中の傍線は筆者が付した。
  - 〔 〕は割書部分
  - 以下は筆者による説明文

『会津藩家世実紀』

- あとがき

## 柏木城はいかなる城であったか

鈴木 啓

『会津藩家世実紀』

永禄6年室町幕府の記録には全国群雄のうち、大名の53人が記されているが、南奥では伊達・蘆名のみで他は大名扱いではない。

米沢城主晴宗（奥州探題・守護）の孫、政宗の代になると、父祖の代を遙かに超えて絶頂期に達し、南奥は群雄割拠から統一に進む。

政宗は天正13年10月畠山氏、14年田村氏、16年佐竹氏・二階堂氏、17年相馬氏とことを構え、同6月伊達・蘆名の決戦となる。

蘆名の黒川城は平城で濠なく、防御性を欠いたから米沢～若松間の谷底道上に強固な柏木城を普請して決戦を予想した。行政機能を要さない番城は、防御と居住性中心の縄張りが欠かせず、守城優先の構造となる。軍学では防御と出撃に適した陰陽和合の縄張りを理想としたから、切岸・帯曲輪を通る道は攻城には複雑・急で屈曲鋭く連続桁形など不明確で、横矢掛や武者隠しが多く危険な通路となる。

城の縄張りや防御施設はどのように設計されるかは、軍学書にある。その代表的な例が『守城記』なので、城の構成を理解する一助として、その一部を抜き書きしてみよう。

『守城記』

籠城の蓄積物には、米・麦・豆・粟・稗・糯・飼草・塩・海草・芋・莖・干葉・干魚・鰹節・漆・渋・鉄・鉛・火薬・弓矢・鎗・鉄砲・火縄・紙・縄・釘・竹木・板・藁・菝・薪・油・蠟燭・綿・布・炭・薬種などがある。多くの倉庫が必要である。

守城兵と持口配り（配置）は10分の3は旗本・近習（主郭守兵）、10分の4は外郭線守兵、10分の3は遊軍（転戦守兵）に分割する。外郭線の虎口はその大小広狭に応じて兵を配分し、虎口間（平という）にも割付け、何間持場と定める。

城中堅固の平は老兵に守らせ、城兵少ない場合は壮士に守り難い箇所を配る。家中諸士の他、武具・細工工人・鍛冶・番匠・壁塗等の類は城中に籠るべし、其外無益の女童等は籠置くべからず。職人も籠城している。

根城（本城）に籠る時、兵多城狭くして惣構の内の市店を守勢の宿所に配与へ、或は家なき所には小屋を掛て宿せしむる也。諸方の砦より本城へ集り来る勢又他国の浪人或は近国より加勢等兼て宿所なき輩なり。

茶道料理人坊主台所の小役人等は、本丸台所に置べし。弓鉄砲の足軽は頭々の屋敷に置べし。（台所は本丸に置かれる）

本城の櫓に昼夜とも遠見を置き、鐘太鼓を置、時刻を知らせ敵の押寄る時、又火災有時相図を定置て諸手へ知らしむべし。遊軍の内、廻番の者、惣構の内小路々々残らず巡行する也。

矢倉々々其外役所は夜は燈を点じ俄に変有時、周章せざる様になし、又常に怪き者忍来杯見顕すべし。門々は昼夜とも扉を閉置、又出入する時は相言を以て改め、疑無時は潜戸より通すべし。夜は篝を焼き、或いは大挑灯を燈して出入を改むべし。

旗本出勢の時本丸にて合具（法螺）にて三段の相図を成し、諸士兼て定置立場へ集る也。

あとがき 柏木城はいかなる城であったか

諸手物主（指揮者）の出勢人数を集る相図は、拍子木・銅鑼の類で本丸相図と紛れざる物を用ゆべし。寄手よりは必ず城兵を引出して、取て返して付入にせんとし、或いは城兵を遠く引出して他の攻口より其虚に乗じて急に乗取り等の謀をなす故に、城際に攻来る敵を追立るとも、追討一町に過ぐるべからず。

敵俄攻（短期攻）にする時は、先味方の鉄砲を頻に放て猶退かざる時には、遊軍を増加して益急に放つべし。向より打んよりは横に打に利あり、横に打んよりは敵の蟻附したる後勢を打崩に其利あり。敵猶進んで屏を乗越んとする時は、走矢倉に上て槍長刀にて突落し、切落すべし。

守城記の挿絵

以上、『守城記』の一端である[（ ）内は筆者]。

守城戦術があって縄張り・構造がきまることを、肝に銘ずる必要がある。

柏木城の中心部は広く平坦で戦闘指揮所らしく、大勢の兵士が複雑な命令に即刻機敏に反応できるように幅広い帯曲輪が用意されている。

石積みは土塁の補強と銃弾除けの施設で、長い石塁は、攻城軍を横隊から縦隊侵入に変えさせての側斜（横矢）のためと考えられ、平城・中村城の捨堀と用途は同じであろう。

虎口1の大平石は積石の中に配されているのではなく、単独の立石なので鏡石とは異なり信仰上の施設ではないだろうか。磐瀬郡長沼城の本丸下の帯曲輪に、巨石が立てられ、摩利支天石（武士の守り本尊・化生石）と記録にみえる。仏教では摩利支天は陽炎の神格化されたものであり、兵火の難を救う軍神とある。

柏木城の、恐らく東北地方に唯一遺存するのではないかとされる馬出は、絵図上では各所の城郭にみられるが、仙台城・二本松城などでは塁濠線に沿って構築されていることがわかる。これは攻城軍に巻き詰められて孤立した時、矢弾で応戦しながら怯んだ隙に突撃して形勢の逆転を計る起死回生の施設である。柏木城では主郭東の大型の堀切の外にあり、両者の連絡には木橋（引橋か桔橋）があったろう。馬出の東には曲輪4があり、その用途は不明なので、時間差の普請も考えなければならない。馬出をはじめ本城中心部は何があっても守り切る気概の伝わる縄張りと言えよう。

まとまりのない守城兵は単純連郭でもよいが、大軍が一体行動の場合は囲郭式配置、居住部の肥大化となろう。

東京都八王子市の滝山城は50区画（郭）程あり戦闘性と居住性を備えた後北条氏の動員体制を示すものとして史跡に指定されている。同じく八王子城とともに、在りし日の柏木城を考える上で参考となる。

柏木城跡

柏木城の要点は以下のようにまとめられよう。

- 柏木城は、黒川城に代わる防衛拠点として蘆名氏の築城術を傾けた構造を呈しており、戦国末期を代表する山城である。
- 伊達氏との東北における戦国の覇者を決する戦い、秀吉による小田原征伐前段の決戦を予想しつつ、蘆名全軍投入をも計ったとみられる城である。
- 時代的にも地域的にも、当城に匹敵する遺跡は東北では稀であろう。

## 報告書抄録

|        |  |
|--------|--|
| ふりがな   | ふくしまけんやまぐんきたしおぼらむら　かしわぎじょうあと   |
| 書名     | 福島県耶麻郡北塩原村　柏木城跡  |
| 副書名    |  |
| 巻次     |  |
| シリーズ名  | 北塩原村文化財調査報告書   |
| シリーズ番号 | 第3集  |
| 編著者名   | 布尾和史、布尾幸恵、木村郁夫、五十嵐怜、長島雄一、石田明夫、高橋 明、高橋 充、鈴木 啓   |
| 編集機関   | 北塩原村教育委員会  |
| 所在地    | <span>〒</span> 966-0404　福島県耶麻郡北塩原村大字北山字村ノ内4147 <p><span>〒</span>966-0402　福島県耶麻郡北塩原村大字大塩字下六郎屋敷2134（平成26年 4月～）</p> |
| 発行機関   | 北塩原村教育委員会  |
| 発行年月日  | 2014年 3月31日  |

| 所収遺跡名          | 所在地   | コード  |      | 北緯（新）     | 東経（新）      | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因                        |
|----------------|---|------|------|-----------|------------|------|------|-----------------------------|
|                |   | 市町村  | 遺跡番号 |           |            |      |      |                             |
| かしわぎじょうあと 柏木城跡 | <span>ふくしまけんやまぐん 福島県耶麻郡 きたしおぼらむら 北塩原村 おおあざかしわぎじょうほか 大字柏木城外</span> | 4021 | 0021 | 37°39′46″ | 139°58′50″ |      | 表面調査 | 北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会による学術調査 |

| 所収遺跡名 | 種別  | 主な時代 | 主な遺構                        | 主な遺物 | 特記事項   |
|-------|-----|------|-----------------------------|------|--|
| 柏木城跡  | 城館跡 | 中世   | 曲輪、堀切、馬出、帯曲輪、榊形虎口、土塁、石積み、石塁 |      | 戦国末天正後半期の山城。虎口や土塁、区画施設に石積みが多用され、高石垣が普及する以前の城郭の特徴をよく残す。会津蘆名氏が築いた境目の城として伊達氏に対する防衛拠点となった。 |

|    |   |
|----|---|
| 要約 | <p>柏木城跡は、天正期後半の山城である。主郭を含めた中心部の規模は東西に約300m、南北に約200mで、周囲の山麓には更に遺構が広がっている。曲輪や土塁、馬出し、堀切など、遺構が良好な状態で残り、虎口や土塁、区画施設に石積みを使用しているのが特徴である。織豊系城郭が会津で展開する前段階の、天正期における石積みが多用された城郭である。築城主は会津を本拠地とする戦国大名蘆名氏と考えられ、文献には天正12年築城と記載される。築城後は国境の護りの要となり、天正13年、伊達政宗ひきいる軍は松原出兵後大塩へ向かうが柏木城を眼下にして松原に引き返したという（「政宗記」）。</p> <p>天正17年、摺上の戦いで蘆名義広が伊達政宗に敗れた後、廃城となったとされる。城内の虎口や土塁などで使用される石積みは、同じく天正期後半に関東甲信越地方にみられる石積みを多用した戦国期城郭に類似しており、会津地方における代表例と言え、枳形虎口や大平石の採用も同じ頃のものとして時代性をよく表す。</p> <p>北や西側には斜面を下った場所に連続する平場群があって城域は更に周囲に広がるとみられており、その規模も大きなものとなる。技術的には当時の最新技術が諸処に反映されており、会津の戦国大名蘆名氏の築城技術の粋が凝らされたものといえ、本城黒川城跡や向羽黒山城跡とともに重要城郭と言える。</p> |
|----|---|

北塩原村文化財調査報告書 第3集

かしわ ぎ じょう あと  
柏 木 城 跡

《北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会の記録》

2014年3月31日

発 行 北塩原村教育委員会  
〒966-0404  
福島県耶麻郡北塩原村大字北山字村ノ内4147  
印 刷 三洋印刷株式会社  
〒965-0053  
福島県会津若松市町北町上荒久田字鈴木163